国立国語研究所学術情報リポジトリ

An Attempt to Understanding of Kawasaki Municipal News Movie using Narration Analysis : As a Framework for Building Citizen Archives

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 春木, 良且, 田中, 弥生, 田村, 寛之, HARUKI, Yoshikatsu, TANAKA, Yayoi, TAMURA, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001525

川崎市市政ニュース映画のナレーション分析を用いた映像理解の試み ー市民アーカイブズ構築のための枠組みとしてー

春木 良且（フェリス女学院大学 国際交流学部）†
田中 弥生（東京大学大学院 総合文化研究科）
田村 寛之（一般社団法人カワサキノサキ）

An Attempt to Understanding of Kawasaki Municipal News Movie using Narration Analysis - As a Framework for Building Citizen Archives -

Yoshikatsu Haruki (Ferris University)
Yayoi Tanaka (University of Tokyo)
Hiroyuki Tamura (Kawasaki-no-saki)

要旨

報告者らは、神奈川ニュース映画協会が作成し公開していた神奈川県市政ニュース映画のうち，川崎市に関するものについて，昭和 27 年から平成 19 年までの全 716 本（公開分）を，川崎市市民文化局市民文化振興室，川崎市市民ミュージアムの協力のもとでアーカイブズ化するプロジェクトを実施している。現在，戦後の高度経済成長期にフォーカスを当て，川崎市を中心とした都市化，工業化の姿を明らかにするために，昭和 40 年までの高度成長期前期までの分析を行っている。

映像そのものは，被写対象である地域や社会設備と政策を映したもので，それだけでは分析，理解が困難であり，そこに挿入されている，ナレーションやテロップなどの言語情報が，重要な説明情報となっている。本発表では特に，ナレーションに着目し，マルチメディアコーパスの構築とそれらを用いた映像解析に関して，現況を報告する。

１．研究の背景、経緯

報告者は，情報技術を専攻するが，特に戦後社会，高度経済成長期に焦点を当て，工業技術の進歩による社会変化を研究している（春木 2015）。吉川（2012）では，「今日我々が，日本の経済・社会として了解するもの，現代日本人をとりまく基本的な生活パターンは，いずれも高度成長期に形作られた」と指摘されている。端的に言えば，技術開発を主軸として，資本投下された製品が消費者に対して提供されていく社会のサイクルが，産業資本主義として確立していったのがこの時代である。

都市部を中心に，この時代に登場した，自由意思による購買行動を行う社会階層としての，消費者，一般大衆は，以降の社会において，新たに社会，文化の担い手として，戦後社会を牽引していくことになる。経済発展理論に言う，「大衆消費社会」の成立である。政治を含め，社会の様々な側面に発言力，存在感を増していく社会階層を，以降，市民と総称するが，この時代を特徴づける多くの記録は，公的機関や公文書だけではなく，市民の元に多く保存されているということが推測される。特に，昭和 30 年代以降は，写真技術，映像技術が進歩し，カメラなどの機器が大衆化されることで，市民が写真という形式で多くの記録を残し

†haruki@ferris.ac.jp

て行った。

報告者は，こうした個人の記録を，蓄積，継承することで，市民アーカイブズを構築し，その時代の市民の姿を明らかにすることを試みている。しかしそれらの多くが私的記録であって，纏まった形で公開，継承されることは非常に少ない。さらに個人の記録は，時代をミクロに切り取ったものであり，時代や社会に対するマクロの観点が欠如しているのも否定できない。

今回，川崎市市民文化局市民文化振興室，川崎市市民ミュージアムの協力のもとで，神奈川ニュース映画協会が作成し公開していた神奈川県市政ニュース映画のうち，川崎市の依頼によるものについて，昭和 27 年から平成 19 年までの全 716 本（公開分）を分析する機会を得た。

この膨大なニュース映画のうち，今回は特に高度経済成長期に入って行く川崎市の記録という意味で，最も資料としての価値が高い，昭和 2，30 年代に焦点を当てる。川崎市は，京浜工業地帯の成立に合わせて，日本の工業都市の中核となって行くが，それはまさに高度経済成長期の牽引車とも言える存在であり，多くの資本や人がそこに集中して行った。こうした点から，市政を記録したニュース映画は，この時代をマクロに捉えるための恰好の素材であると言えよう。

川崎市政ニュースは，昭和 27 年から始まるが，映像のみから，時代の状況分析を行うのは非常に困難である。さらに，当時の映像の解像度の低さ，劣化の他に，被写対象である川崎地域の変化の激しさなどといった点も指摘できる。そのため，そこに挿入されている，ナレーションやテロップなどの言語情報が，映像を補足，意味づけするための重要な分析資料となっている。本報告では，この川崎市政ニュースのナレーション，テロップ等の言語情報に着目し，それらを用いた分析を行った試みについて述べる。尚，昭和 31 年前後から昭和 48 年までの期間を高度経済成長期と総称するが，以降では経済面のみならず文化，社会を広く捉えるため，主に高度成長期と呼ぶ。

２．川崎市政ニュース映画の状況と価値

２.１　市政ニュース概要

一般大衆に訴求力の高いメディアとして，テレビがその地位を確立するまでは，映画が大衆娯楽の代表的なメディアであった。特に終戦後の娯楽や情報に人々が飢えていた時代には，映画はマスメディアとして大きな役割を果たしていた。現在のテレビでも常に高い視聴率を獲得するものの一つとして，ニュース番組があるが，映画の時代においても，ニュース映画が本編の上映前などに流されており，人々にとって貴重な情報源であった。今回の分析対象は，主に映画館で公開されたニュース映画である。

その殆どが，約一，二分程度の長さのもので，社団法人神奈川ニュース映画協会の制作によるものである。同団体は，昭和 25 年に設立され，神奈川県や，横浜市，川崎市など，県内の公共団体の施策と事業を PR するニュース映画や記録映画を，数多く制作してきたが，平成 19（2007）年に役割を終え解散している。正式な記録はないが，最後に映画館で流されたニュース映画は，この神奈川ニュース映画協会のものだと言われている。

これら市政ニュース映画は，昭和戦後史を記録した貴重な資料ではあるが，主に川崎市の政策内容を説明するもので，余り一般に訴求するものではない。特に，高度経済成長前の昭和 20 年代の動画は，衛生観念や人権意識などが大きく異なった時代のものでもあり，現代の感覚からは不愉快な映像や表現，題材も含まれている。

しかし，港湾部の発展やインフラの整備に合わせ，都市部へ人口が集中し，産業集積が進むことで，日本の工業技術を支えた京浜工業地帯が成立していくプロセスが記録されているという意味で，他の自治体には類を見ないほど重要な資料であり，研究資料としても貴重なものである。

神奈川ニュース映画協会の解散にともない，多くのニュース映画が，横浜市，川崎市に移管された。川崎市の委託による分は，川崎市民ミュージアムがデジタル化等を行い，権利処理等も終えて，現在は川崎市市民文化局が管理を行っている。また各映像は，「映像アーカイブ川崎市」として YouTube 等で公開されており，市政関係イベントの素材としても利用されている。

２.２　市政ニュースの着目点

前述のように，川崎市の委託分は昭和 27 年度から始まるが，公開年度と本数は図 1 のようになっている。

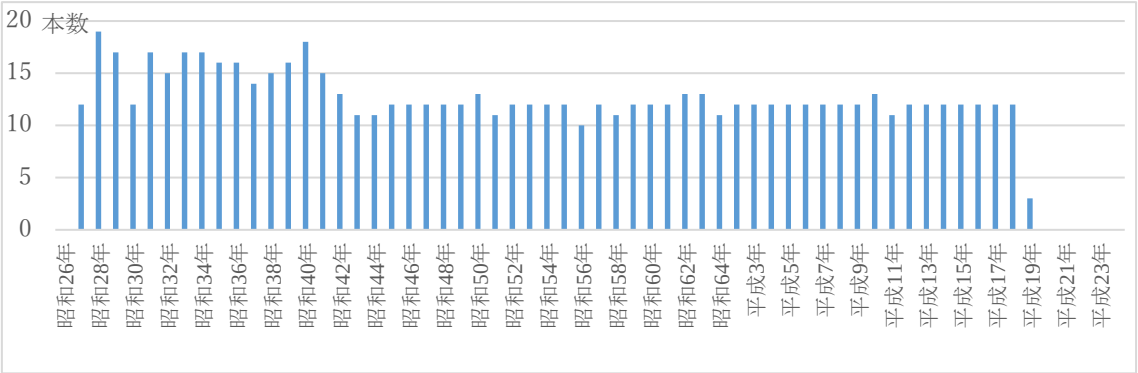

図 1.川崎市政ニュース映画公開年度別本数

ここで見るように，長期に渡ってコンスタントに作成されており，市政ニュースという性格から，川崎大空襲によって荒廃したインフラの整備が本格化した昭和 28，9 年頃と，東京オリンピック前後の昭和 39，40 年頃が多いのであろうと推定される。

前述のように，報告者は戦後の高度成長期における技術の進歩による社会変化を専門としているが，一般に高度成長期は，以下のように区分されて理解されることが多い。

① 戦後混乱期　～昭和 25 年
② プレ成長期　～昭和 30 年
③ 成長前期　～昭和 35 年
④ オリンピック準備期　～昭和 39 年
⑤ 万博準備期　～昭和 45 年
⑥ 成長後期　～昭和 49 年

川崎市政ニュースは，昭和 27 年度分から残されている。特に，戦後の混乱期から，経済成長直前の昭和 20 年代，そして昭和 30 年代に入って，社会の何が変わって行ったのか，社会のインフラと，人々の生活の二つの側面から，変化の流れを捉えた。

川崎市依頼分ではないため，今回の対象には含まれていないが，横浜市の基地対策課から

公開されている，同じ神奈川ニュース映画協会による，昭和 26 年の神奈川県ニュース（「復興への動き」）に，京浜工業地帯と川崎の当時の様子が，若干取り上げられている（図 2)。その中に，以下のようなナレーションがある。

「*国際港都横浜、新工業都市川崎には、逞しくビルの建設が急がれていますが…*」

ここで触れられているように，1952 年（昭和 27 年）4 月に発効した，講和条約，サンフランシスコ条約の直前，既に戦後の復興に向けて，横浜，川崎は各々国際港都横浜，新工業都市川崎という役割で，復興計画と開発が始まっていたことがわかる。

図 2.「復興への動き」

端的に言えば，市政ニュース映画には，こうした一連の高度成長期前期に起こった，社会を根底から変えて行ったマクロの変化が記録されている。報告者らの本来の関心は，それが市民のミクロの変化にどう繋がったのかにあり，当時の記録である市政ニュース映画の分析を通して，それらを明らかにしていくのが研究全体の骨子である。

３．映像理解におけるナレーションの意義

ニュース映画の基本的な構成としては，タイトル画面のあとすぐ本編が始まり，ナレーションによって進行する。動画は，概ね 1，2 分程度のものであり，当初はアスペクト比が映画の標準サイズであるスタンダードサイズ（1.33:1）だったが，昭和 36 年分から，ビスタサイズ（1.66:1）化された。さらに昭和 54 年 04 月 15 日分（「リエカ・フェア開かれる」）からカラー化されている。また昭和 41 年頃から収録時間が，2 分程度になってきている。

ニュース映画に包含されている情報は，映像そのものと，文字情報の 2 種類である。各ニュースには，それぞれタイトルがついているが，映像サイズがビスタ化されて以降，タイトルが縦書きから横書きになり，若干文字数が多くなる傾向にある。

文字情報としては他に，コンテンツ中に含まれるものとして，ナレーション，テロップ，さらに被写体中の看板や貼り紙など，いわゆる文字景観などが含まれる。ナレーション以外の音声は，基本的に BGM や実況音だけであり，言語情報としては市長の発言などごくわずかである。その基本的な構成は，最後まで変わらない。若干のテロップが付加するものもあるが，政党や設備の固有名などごくわずかである。また短時間に多くの内容を扱っているので，通常の映画やドキュメンタリーよりはシーンの転換やコマ割りがかなり細かいのが特徴である。そのため，映像に対してかなり多くのナレーションが付加されている。

この一連のニュース動画は，それぞれテーマそのものが明確である。報告者らは，テーマ

を大まかに以下のように分類した。

① 公的活動
② 産業・経済
③ 社会
④ 生活

さらにそれらを，それぞれいくつかの小項目に分類した。詳細を表 1 に示す。

表 1. 市政ニュース映画のコンテンツ分類

①公的活動	行政	議会・庁舎 警察 消防 病院 広報活動 町内会・自治会
	インフラ	港湾 鉄道・駅 バス 道路・橋梁 上下水道 水防 住宅・団地 ゴミ処理 その他設備
	社会設備・ 福祉サービス	公園 授産所 養老院・老人施設 保健所 衛生試験所 保育所 青少年施設 その他医療施設
②経済	産業・経済	農産物 農協
	労働・仕事	
	イベント	国体・スポーツ大会 教育・広報イベント

③社会	事件・事故	火災・火災予防
	社会課題・社会的弱者	
	教育	学校 学習活動
	福祉	老人福祉 障碍者
	市民活動	赤十字 赤い羽根募金 緑化運動
④生活	市民生活・風俗	季節 師走・新年
	文化	文化財 古墳・遺跡 神社・仏閣
	習俗・行事・儀式	祭り 記念日 こどもの日 成人式
	遊戯系	野球場 競輪・競馬場

これによって，川崎の何が題材として取り上げられているのか，川崎における関心事項を判断することは可能である。本研究の目標としてはさらに，表現されている対象の分類や時代ごとの傾向の分析，さらに各事象や変化が，その時代においてどのように評価されていたのか，行政側や市民にはどう受け止められていたのか等，コンテンツそのものを分析して，時代の特性や人々の意識などを明らかにしたいと考えている。

映像そのものに対しては，画像解析など被写体の特定や，被写体ごとの頻度や総映写時間を抽出することで，評価を推定することは可能であろうが，現実問題として，全ニュースの総時間は，延べ 20 時間強ほどになり，映像データだけでは，こうした一連の分析は非常に難しい。さらに官制のニュース映画であるため，評価や感覚的な表現は全くなされていないという点も指摘できる。

そこで本研究では，言語情報であるナレーションに着目し，ニュース映像のコンテンツ分析を行った。ニュース映画という性格上，映像化されているものに対しては，ほぼシーン毎にナレーションが付加されており，言語情報の分析によって，映像表現の持つ意味や

データなどを推定することは十分可能である。前述のように，昭和 2，30 年代のものは，映像自体が劣化していることもあり，このナレーションが動画の分析においては重要な情報となっている。本ニュース映画に関しては，川崎市民ミュージアムによって，ナレーションの書き起こしが行われている。

図 3 には，報告者の作成による動画の構成表例を示す。昭和 27 年 7 月 24 日付の「川崎市政 28 周年」と題されたもので，30 秒程度のものである。川崎市政ニュース映画の中でもごく初期のもので，オープニングを含めて八つほどのシーンから構成されており，各々が 2，3 秒で目まぐるしく移り変わる。初期のものは，総時間が短く，ナレーションも比較的少ないものが多いが，本ニュースも，80 文字ほどで，全動画の中で最も少ない。

ニュース映画という性格上，映像化されているものに対しては，ほぼシーン毎にナレーションが付加されており，言語情報の分析によって，映像表現の持つ意味やデータなどを推定することは十分可能である。

メタ情報

ニュースタイトル	川崎市政２８周年	※川崎市データより
公開日	昭和27年07月24日	※川崎市データより
ファイル名		
目録番号	S27-3	※年度-通し番号
時間	0:00:30	※[h]:mm:ss

コンテンツ情報

場所	全区	※川崎市データより
地名・キーワード	市制記念	※川崎市データより

構成表

NO	カット	カット映像	タイム	コメント・ナレーション	スーパー	コンテンツ	タグ
1	オープニング				川崎市政二十八周年 川崎		商店街
2	トロリーバス		0:00:04				旧市庁舎 トロリーバス
3	工業地タオ		0:00:06	市政28周年を迎えた川崎市では、7月1日その記念行事を行いました。			京浜工業地帯
4	川崎競輪		0:00:09				競輪 川崎競輪
						川崎競輪場	
5	川崎球場		0:00:13	人口37万、無軌道電車も走る、スマートな港湾港都としての、目覚ましい発展ぶりを、喜び合う一日でした。			野球 川崎球場
6	不明		0:00:16				
7	市庁舎 パレード		0:00:19				旧市庁舎 ボーイスカウト
8	エンド		0:00:30				花火大会

図 3.構成表例

オープニングに次いで、図 4 に示すような、トロリーバスと旧川崎市庁舎と思われる建物が、1 秒半ほど映る。数シーンの後に、以下のようなナレーションがなされる。

「*人口 37 万、無軌道電車も走る、スマートな港湾港都としての、目覚ましい発展ぶりを、喜び合う一日でした。*」

図 4. 画面キャプチャ（トロリーバスと旧川崎市庁舎）

トロリーバスは，かつては無軌道電車，無軌条電車等と呼ばれていたが，「無軌道電車も走る，スマートな港湾港都」という表現に注目する。川崎市の発展の一つの例として扱われており，「スマートな」という表現から，都市や現代をイメージさせる。さらに「目覚ましい発展ぶり」という表現には，川崎大空襲等の戦災からの復興という意味合いを強く感じさせる。

そもそもトロリーバスは，軌道が無く設備の建設が不要なため，戦後，復興のすすむ大都市部では比較的早い段階で路線が開業しており，川崎もそうした都市の一つであった。しかしこの後，昭和 30 年代半ばからは，内燃機関バスの性能が向上し始めるため，川崎市も 1967 年（昭和 42 年）に市の交通事業再編計画によって，全廃されている。本ニュース映画は，この間の貴重な記録であるとともに，トロリーバスが当時の社会においては，復興をイメージさせる社会リソースだったということもわかる。

このように，市政ニュース映画においては，ナレーションを中心とした言語表現は，映像表現の説明情報，あるいはメタ情報として機能しており，コーパス化することで，動画に対するタグとして機能させることも可能であると考えられる。本研究では，言語情報に着目することで，動画の分析を試み，被写体となっている当時の社会状況の理解を目指すものである（図 5）。

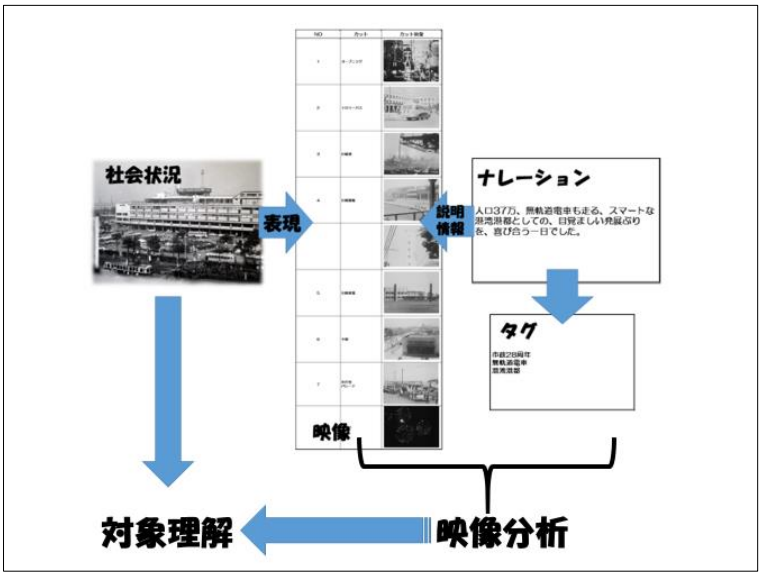

図 5． 映像分析と対象理解

４．ナレーション分析

４．１　分析方法

本研究では，ナレーションの分析に，自然言語処理の要素技術を用いたテキストマイニングのためのフリーウェア KHCoder（樋口他 2014）を利用した。ナレーションの書き起こしデータから抽出された語について，「昭和 20 年代・30 年代」，「昭和 40 年代・50 年代・60 年代」，「平成 00 年代・10 年代」の三つの区分の比較を行った。

なおこの三区分は、前述の高度成長期前後、オイルショック後の安定期、そしてバブル経済期という時代のトレンドを反映したものである。高度経済成長とバブル経済は、日本の社会のありかたに大きく影響を及ぼしたのは言うまでもない。そのため、人々の関心や政策課題も大きく異なることが推定されるのである。

４．２　語の出現頻度

三区分の語の出現頻度を表 2 に示す。また、三区分それぞれの出現頻度の高い上位 50 語[1]からを表 3 から表 5 に示す。

表 2. 区分ごとニュース数と抽出語数及び異なり語数

区分	ニュース数	総抽出語	1 本あたり平均語数	異なり語
昭和 20 年代・30 年代	205	29,106	142.0	4,107
昭和 40 年代・50 年代・60 年代	293	50,231	171.4	5,448
平成 00 年代・10 年代	219	44,134	201.5	4,899
合計	717	123,471	172.2	

表 2 から，１本あたりの語数が時代とともに増加していることがわかる。

表 3. 昭和 20 年代 30 年代ナレーションの頻出語 50 位

順位	抽出語	品詞	出現回数	順位	抽出語	品詞	出現回数	順位	抽出語	品詞	出現回数
1	川崎	地名	196		処理	サ変名詞	32	38	ゴミ	名詞	22
2	行う	動詞	125	21	今	副詞可能	30		学校	名詞	22
3	市内	名詞	76		青少年	名詞	30		楽しい	形容詞	22
4	市民	名詞	69		明るい	形容詞	30		施設	サ変名詞	22
5	子供	名詞	67	24	交通	名詞	29		利用	サ変名詞	22
	川崎	組織名	67		道路	名詞	29	43	会館	名詞	21
7	完成	サ変名詞	64	26	設備	サ変名詞	28		現在	副詞可能	21
8	市	名詞 C	58	27	発展	サ変名詞	27		市立	名詞	21
9	市長	名詞	49	28	迎える	動詞	26		消防	名詞	21
10	建設	サ変名詞	48		工場	名詞	26		続く	動詞	21
11	工事	サ変名詞	44		人口	名詞	26		地帯	名詞	21
12	工業	名詞	42		全国	名詞	26		町	名詞 C	21
13	このほど	副詞可能	41	32	委員	名詞	25	50	衛生	名詞	20
14	開く	動詞	38	33	今年	副詞可能	25		始める	動詞	20
	人	名詞 C	38		昭和	固有名詞	25		受ける	動詞	20
16	作る	動詞	36	35	市営	名詞	24		生活	サ変名詞	20
	進める	動詞	36	36	近代	名詞	23		大会	名詞	20
18	都市	名詞	33		毎日	副詞可能	23		備える	動詞	20
19	住宅	名詞	32								

1　品詞が名詞 B，動詞 B，形容詞 B，副詞 B，否定助動詞，形容詞（非自立）のものは除外した。

表 4. 昭和 40 年代 50 年代 60 年代ナレーションの頻出語 50 位

順位	抽出語	品詞	出現回数	順位	抽出語	品詞	出現回数	順位	抽出語	品詞	出現回数
1	川崎	地名	324	19	広場	名詞	66	37	建設	サ変名詞	41
2	市民	名詞	237	20	交通	名詞	64	38	会館	名詞	40
3	行う	動詞	162		都市	名詞	64		町	名詞 C	40
4	川崎	組織名	157	22	市長	名詞	62	40	花	名詞 C	39
5	子供	名詞	146		緑	名詞 C	62		楽しい	形容詞	39
6	市内	名詞	130	24	訓練	サ変名詞	57		活動	サ変名詞	39
7	このほど	副詞可能	92		処理	サ変名詞	57		工事	サ変名詞	39
8	開く	動詞	83	26	今	副詞可能	55		新しい	形容詞	39
9	完成	サ変名詞	81	27	今年	副詞可能	53	45	記念	サ変名詞	38
	市	名詞 C	81	28	民家	名詞	51		人々	名詞	38
	利用	サ変名詞	81	29	生活	サ変名詞	50	47	楽しむ	動詞	37
12	人	名詞 C	79	30	緑地	名詞	46	48	前	副詞可能	36
13	公園	名詞	78	31	事故	名詞	45	49	安全	形容動詞	35
14	センター	名詞	75	32	オープン	サ変名詞	43		元気	形容動詞	35
	施設	サ変名詞	75		プール	名詞	43		持つ	動詞	35
16	進める	動詞	72		参加	サ変名詞	43		多摩	地名	35
	文化	名詞	72		自然	形容動詞	43		日本	地名	35
18	作る	動詞	69		誕生	サ変名詞	43				

表 5. 平成 00 年代 10 年代ナレーションの頻出語 50 位

順位	抽出語	品詞	出現回数	順位	抽出語	品詞	出現回数	順位	抽出語	品詞	出現回数
1	川崎	地名	259	20	皆さん	名詞	51	36	はじめ	副詞可能	38
2	市民	名詞	238	21	緑地	名詞	50		花	名詞 C	38
3	川崎	組織名	230	22	場	名詞 C	49		健康	形容動詞	38
4	行う	動詞	162		日本	地名	49		文化	名詞	38
5	利用	サ変名詞	90	24	民家	名詞	48	40	体験	サ変名詞	37
6	センター	名詞	87	25	都市	名詞	47	41	会場	名詞	36
7	子供	名詞	82	26	開く	動詞	46		楽しむ	動詞	36
8	人	名詞 C	79	27	完成	サ変名詞	45		進める	動詞	36
9	市内	名詞	77		交流	サ変名詞	45		動物	名詞	36
10	参加	サ変名詞	75	26	展示	サ変名詞	44	45	迎える	動詞	34
	市長	名詞	75	27	高橋	人名	42		豊か	形容動詞	34
	施設	サ変名詞	75		多摩川	地名	42	47	ゴミ	名詞	33
13	さまざま	形容動詞	66	29	このほど	副詞可能	41		楽しい	形容詞	33
14	活動	サ変名詞	60		公園	名詞	41		作る	動詞	33
	多く	副詞可能	60		地域	名詞	41		情報	名詞	33
16	開催	サ変名詞	59	32	スポーツ	名詞	40		新しい	形容詞	33
	記念	サ変名詞	59		今年	副詞可能	40		平和	形容動詞	33
18	自然あどｎ	形容動詞	53		多摩	地名	40				
19	オープン	サ変名詞	52	35	生活	サ変名詞	39				

表 3 から表 5 を見ると，いずれの年代でも出現回数の上位には共通して「川崎」「市民」「子供」などが含まれているが，昭和 20 年代・30 年代では，7 位以降で「完成」，「建設」，「工事」，「工業」といった工業的発展を示す語が見られ，昭和 40 年代・50 年代・60 年代では，9 位以降で，「完成」「利用」「公園」「施設」「センター」などが使用され，前の時代の工業的発展が完成しそれらの建設物などを利用する時代であることがうかがえる。平成 00 年代・10 年代でも，5 位以降で「利用」「オープン」「参加」「施設」「活動」「開催」「記念」

「皆さん」「緑地」「完成」「交流」といった語が見られ，建設物を利用した活動への参加や市民の交流が進むことがうかがえる。

４．３　対応分析

４．２で示した出現語について，対応分析を行った結果を図 6 に示す。

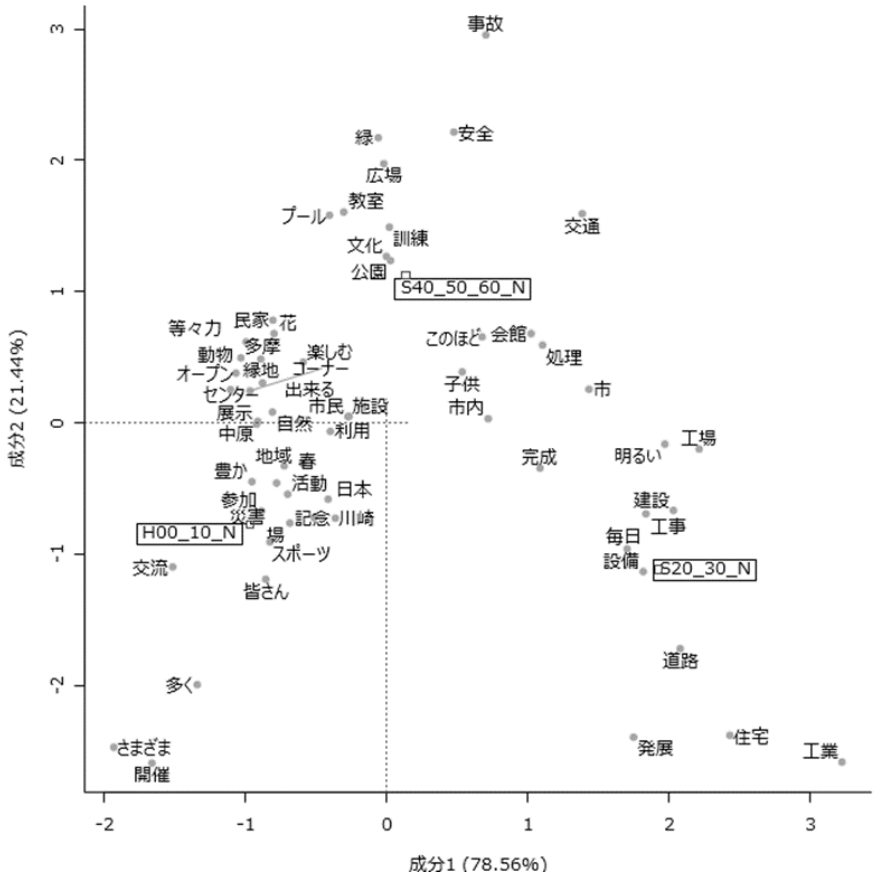

図 6.　区分による対応分析結果

古い時代が右側に配置され，新しい時代が左側に配置されている。４．２でも見たように，昭和 20 年代･30 年代では設備や道路の建設工事が行われ，工業的な「発展」の時代であり，昭和 40 年代・50 年代・60 年代には，交通，会館，教室，公園など「文化」的なことが活発に行われた様子と，訓練など「安全」への意識がうかがえる。また，平成に入ると，スポーツや記念など「交流」する様子がうかがえる。

例えば，KH コーダーの KWIC コンコーダンスを利用して，「川崎」と「発展」の共起を確認すると，表 6 に示したように，昭和 20 年代 30 年代では 9 件，昭和 40 年代 50 年代 60 年代では 4 件，平成 00 年代 10 年代では 3 件の共起が見られた。ナレーションを見ると，「日本産業の発展とともに，伸び行く川崎市の躍進ぶりが期待されます」「工業都市としてますます発展の一途をたどる川崎。」のように，成長していく様を示す昭和 20 年代 30 年代と，同様に「日々に発展する川崎市の・・・」と，成長中であることを示す昭和 40 年代 50 年代 60 年代に対し，平成に入ると「昭和 30 年代から 50 年代にかけての川崎市の発展と移り変わりを知ることが出来る写真展が開かれています」のように，「発展」が過去のことと

して扱われているのがわかる。

表 6.　「川崎」と「発展」の共起

	前の 20 語		後ろの 20 語
昭和2030年代	ます。ここに大工場が立ち並ぶ日も近く、日本産業の発展とともに、伸び行く	川崎	市の躍進ぶりが期待されます。（↓）工業都市川崎にも、我々祖先が残し
	は何が去来していることでしょう。（↓）工業都市としてますます発展の一途をたどる	川崎	。今日も川崎市は、市民の期待に応えるべく幾多の難問題と取り組みながらたゆま
	発展が約束されています。（↓）商工業とも、ますます発展の一途をたどる	川崎	市恒例の商工祭りは、１０月２３日から５日間、華々しく開幕されました
	ます。近年、耕地が減少したとはいえ、産業の発展にまで寄与し	川崎	の母とも言われるこの用水の創設者の法要当日は、関係者多数が墓前
	で、みんなに大変喜ばれています。（↓）人口５７万を突破し日々に発展する	川崎	市には、今、至る所に建設の槌音が響いています。入江
	た。さらに、７月には、久地に出張所が作られました。発展を続ける	川崎	港。市営埠頭には巨大な２号、３号の上屋が相次いで完成し
	ます。（↓）人口増加率全国一を誇り、工業都市として飛躍的な発展を見せている	川崎	市。埋立地には石油化学工場を中心とした大工場の建設が行わ
	替えもまもなく完了して、市営埠頭は理想的なものに整えられ、工都	川崎	の発展に大きな役割を果たしていきます。（↓）川崎市の水防演習が、去る８月
	緩和し、また、府中県道と第一京浜、産業道路を結ぶ新しい動脈として、	川崎	市の産業の発展に大いに役立つことでしょう。（↓）私たちの住む町をきれいに
昭和405060年代	図・完成図）そして、工事完成の暁には、飛躍的な発展を見せる	川崎	の表玄関としてふさわしい装いを整えることでしょう。（↓）５月５日は子供の日。川崎
	ました。（↓）活気に満ち溢れている川崎の表玄関川崎駅付近。日々に発展する	川崎	市の昭和４３年を振り返ってみましょう。まず、３月には、市西北
	の不注意によるものが多いのです。火の元をもう一度確かめましょう。（↓）日々に発展する	川崎	市の昭和４４年を振り返ってみましょう。まず、市北部地区の行政を
	をいのりました。大正から昭和へ、特に、戦後の復興に力を注ぎ、	川崎	発展の礎を築いた功績は高く評価されています。この日参列し
平成0010年代	人々が集い、大いに楽しみました。そして、この大きなエネルギーが、私たちの町	川崎	を、ふるさととして発展させる力となっていくことでしょう。（↓）先に行われ
	てもらう機会になればと。昔から、産業の町として発展してきた	川崎	。伝統の技能が絶える事なく、若い人たちに受け継いでもらいたい。「て
	世紀ポスター名品展」。写真ギャラリーでは、昭和３０年代から５０年代にかけての、	川崎	市の発展と移り変わりを知ることが出来る写真展が開かれています。また

５．市民アーカイブズの構築に向けて

こと高度成長期に限定すれば，社会においては表 7 に示すように，市民生活の様々な局面での変化が，同時に進行して行った。これらを理念的に理解することは容易ではあるが，動画によって実際の姿を検証できるのは，非常に重要である。その例として，高度成長期を特徴づける「人口ボーナス」を挙げることが出来る。それは，労働力人口の増加率が，人口増加率よりも高くなることで，経済成長が後押しされる状態を言い，高度成長期はまさにその要素が下支えをして行った。日本の戦後ベビーブーマーである団塊の世代が，その人口ボーナスの担い手だったわけであるが，それらはフィクションやアニメーションでは決して表現することはできないだろう。

表 7. 高度経済成長期における特徴的な事象

人々	・人口ボーナス
	労働力増加率が人口増加率よりも高くなることにより、経済成長が後押しされること。子どもと高齢者の数に比べて、働く世代（生産年齢人口：15～64歳）の割合が増えていくことによって経済成長が後押しされる状態を言う。
	・所得、平均寿命
	1950年の時点で、国民一人あたりの所得は124ドル、アメリカの14分の1だった。平均寿命は、男性58歳、女性61.5歳だった。
インフラの変化	・エネルギー革命
	1950年頃までは、石炭が、工業・鉄道・都市で使用される最大のエネルギー源だったが、石炭から石油への転換により、合成繊維、プラスチック、家庭電器などの技術革新などが進んで行った。
	・交通
	東京オリンピック（1964年）に関連して、首都高速1号線をはじめ、多くの交通インフラが整備されていった。
生活	・子供の役割
	かつて、労働と家族が直結していた時代では育児を含め家事の多くが家族全員の仕事であった。高度経済成長期以降、家電の普及、 家事の外部化により家事時間そのものは減少して行った。
	・生活の変化（核家族化）
	産業構造の転換に伴い、急速にサラリーマン化が進む中で、核家族世帯の中で「夫は外で仕事を、妻は家庭で家事・育児を担う」という役割分業が確立し、1970年代までは、家事労働に専念する専業主婦の数は増加し続けた。
	・文化
	例えば、戦前は、女性は和装、男性は家では和装、外では洋装が一般的だったが、特に戦後、働く女性（デパート店員、車掌、スチュワーデス）の登場により、特に都市部では女性の洋装が一般的になっていく。
	・コミュニティ
	高度成長期以前まで、都市では自治会等が、農村では伝統的な村落共同体が形成されていたが、高度経済成長の過程で、都市では新住民の急増、住民層の異質化と流動化により、地縁を基盤とした地域共同体が崩壊して行った。
社会の変化	・流通革命
	1960年代から始まった高度経済成長期に入ると、所得水準の向上にともない大量生産、大量消費をはじめとする大衆消費社会が到来し、小売部門では零細過多の小規模小売店と百貨店に加えて新業態であるスーパーマーケットの登場により第1次流通革命が起こった。
	・一次産業
	1955年には、就業者数の41%を占めていた第1次産業は、鉱工業生産の拡大に伴う第2次産業への大幅な就業移動により1960年には第3次産業にその座を明け渡し、更に1965年には第2次産業の就業者数をも下回るに至った。

図 7 に示すのは，「みんなで体操」と題された昭和 32 年 07 月 17 日付のニュース映画の 1 シーンである。川崎全市で開催されたラジオ体操の会の会場となった川崎大師小学校の校庭に，5000 人の市民が集まりラジオ体操を行っている様子である。小学校の校庭にラジオ体操のために 5000 人が集まるといった状況は，圧巻であり，現在では想像すらできないだろう。ニュース映画のそこかしこに，こうした多くの子供や若い人々が映っており，人口ボーナスという概念を視覚で理解するとともに，時代の空気感のようなものが体感できるのは動画ならではの効果である。その意味で，本動画の教育資料としての価値は非常に高い。

図 7.　小学校校庭でのラジオ体操

ここまで述べてきたように，戦後の大きな社会変化によって現代社会の原型が作られて行ったが，いくつかの事情により，必ずしも時代の記録が残されてはいないということを指摘する。まず，その時代の記録は，全てアナログベース（un-born digital）であり，デジタルをベースとした（born digital）現代とは大きく切断されているという点である。そのため，近年では様々な試みがなされているが，アーカイブズ史料として，時代の重要性に比べて物足りないのは否定できない。

さらにその時代を特徴づけるのは，市民，消費者など，新興階層の登場であるが，それらの人々の姿は，主に個人の私的な記録として残されており，公文書や公的資料には殆ど記録されていないと言っていいだろう。折しも高度成長期には，工業技術の進歩もあり，カメラや映像機器の小型化，低価格化が進み，映像記録を残すという文化が一般化し始めて来ており，個人の記録として，市民像が残されているのである。

報告者らは，この市政ニュースをコアのアーカイブズとして，そこに市民の記録を付加していく，市民アーカイブズ構想（川崎二十世紀アーカイブズ）を推進している（図 8）。幸い戦後社会においては，証言者，目撃者が健在であり，彼らから聞き書き，インタビューなどを行うことも可能である。こうした新たな試みに対して，本研究の題材であるナレーションコーパスが有効であることも，今後検証して行く予定である。

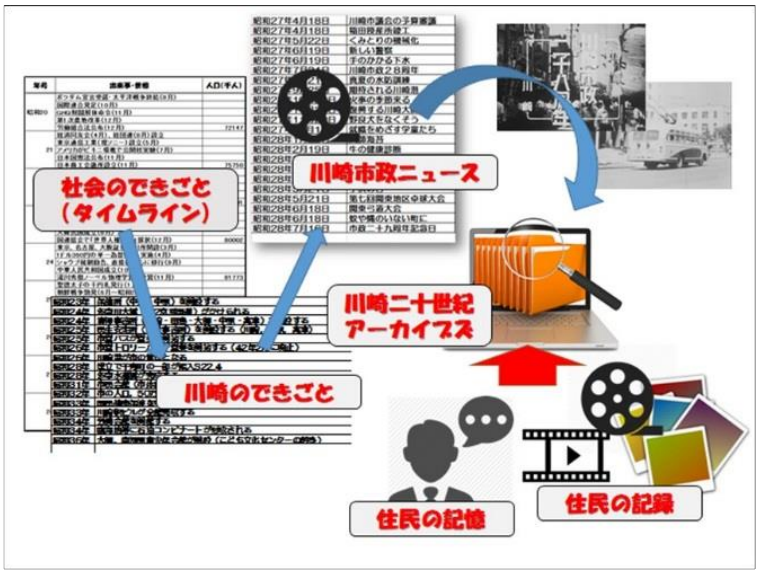

図 8.　市民アーカイブズ構想

謝　辞

本研究は川崎市民ミュージアム，川崎市文化局，映像のまち川崎フォーラムの協力の元に実施したものである。

文　献

国文学研究資料館 (編)(2017).『社会変容と民間アーカイブズ』勉誠出版
春木良且(2015).「民間にある資料のアーカイブス化に向けた試みー商店街ライフログを通して高度成長期を知るー」日本アーカイブズ学会 2015 年度大会
樋口耕一(2014).『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
吉川 洋(2012).『高度成長』中公文庫